

講壇点滴

イエスは主である

コリントの信徒への手紙Ⅰ

一 二章一〜三節

牧師 姜 涇 米

「霊的な賜物」は、私たちの誰にでも与えられるものです。「霊的」の「霊」は神様の霊、聖霊です。「イエスは主である」と言う、それはイエス・キリストを信じる信仰を言い表すことです。パウロはここで、私たちがイエス・キリストを信じる信仰者になることが、聖霊の働きによること、聖霊の賜物だと言っているのです。信仰は、私たちが自分で獲得するものではありません。信仰は、与えられるものです。それを与えてくれるのが聖霊です。そして聖霊の賜物を受けているのは、洗礼を受けてクリスチャンになっている人だけではなく、私たちが信仰を求めようという気持ちを与えられるのも、聖書のお話を聞いてみようという思いを与えられるのも、教会の礼拝に行ってみようという思いになるのも、皆聖霊の働きによることなのです。

「イエスは神から見捨てられよ」とありません。そのような言葉がどうして教会で語られていたのか。それは、霊的興奮状態の中であらぬことを口走るといふ状況においてだと考えられます。このことは二節とも関係してきます。コリント教会の人々の多くはギリシヤ人で、ギリシヤの神を拝む異教徒でした。その偶像の神の前での礼拝には、霊的興奮状態がつきものでした。踊ったり、叫び声をあげ

たりということ、神と一体となったかのよ  
うな気持ちになったのです。コリントの人々  
は、宗教というのはそういう霊的興奮状態を  
引き起こすものだと思っていました。そうい  
うものが教会の中に入りこんできていたのです。

「もの言えない偶像」とあります。偶像  
はもの言えないのだから、偶像の神の前で  
は、人間が語るしかないのです。自分が何か  
を語っていなければ不安になるのです。

「イエスは主である」とは、自分はその僕  
であるということです。僕は、主人の言葉を  
聞き、その命令を待つのです。主が語り、僕  
は聞く、それが主と僕の関係です。「イエス  
は主である」という告白は、この主の前に、  
自分は黙り、沈黙してそのみ言葉を聞くとい  
うことなのです。それは、聖霊によらなければ  
ば実現しないのです。「聖霊によらなければ、  
だれも『イエスは主である』とは言えない」  
というのそういうことです。

生れつきの私たちは、偶像の神しか知りま  
せん。だから、自分が語っていないければ、自  
分が何かしていないければ、不安なのです。自  
分の賜物を誇り、それが発揮され活かされる  
ことを求めるといふのも、そのために起るこ  
とです。

私たちの心は、自分の思い、願い、自分の  
悩みや苦しみ、自分の不満や怒りやいらだち、  
心配、そういう自分の言葉に満ちています。  
その私たちが、礼拝をおして、私たちのた  
めに十字架にかかって死んでくださり、復活  
してくださった主イエス・キリストと出会い、  
聖霊の働きによって「イエスは主である」と  
告白して、主イエスのみ言葉を聞く者とされ  
る、その時私たちの心は開かれ、主を誇る新  
しい喜びの生活が与えられるのです。

(二〇二二年一月九日 共同礼拝)

三月講壇一覧

第一主日(三月六日) 共同礼拝

「説教の驚き」 高橋和人牧師

第二主日(三月十三日) 共同礼拝

「清くなれ」 高橋和人牧師

第三主日(三月二十日) 共同礼拝

「主の權威」 高橋和人牧師

第四主日(三月二十七日)

「キリストの体であり、その部分」 姜涇米牧師

詩編 一〇七・一〜七

コリントⅠ 一二・二七〜三一

詩編 九五・一〜三

コリントⅠ 一二・二七〜三一

詩編 九五・一〜三  
コリントⅠ 一二・二七〜三一